

# 巨乳大家族催眠

男爵平野

画：スカイハウス

# 巨乳大家族催眠



著：男爵平野

画：スカイハウス  
原作：ルネ

PB オトナ文庫



「ん……あ、れる、ちゅっ」  
 「めめるような刺激と温かさ、そして柔らかな感触が下半身から広がってくる。  
 「はっ、ん、わっ……んわっ、んっ」  
 先端がなま暖かい粘液中に包まれ、ちろちろと舐め上げられる。そのあたりで、ゆっくりと意識が覚醒し始める。  
 まだぼんやりとした視界を下半身に向けると、眼鏡をかけた美女が僕のペニスに奉仕をしてくれているのが映る。  
 「……おはよう、美冬さん」  
 「ちゅっ、れる……はい、おはよう、雄一くん」  
 朝の陽射しに相応しい、柔らかな笑顔で僕に挨拶を返す。そこだけを切り取れば、ごくごく一般的な朝の風景だ。  
 しかし、はだけた美冬さんの巨乳には僕のペニスがみっちり挿入されているし、姿を覗かせている雄頭は先走りと唾液でぐちゃぐちゃと濡れ光っている。

第一章 問宮家の性活

目次

|     |         |     |
|-----|---------|-----|
| 第一章 | 問宮家の性活  | 5   |
| 第二章 | 立ち込める不穏 | 73  |
| 第三章 | ご近所付き合い | 157 |
| 第四章 | 巨乳大家族   | 238 |



父親の再婚により養母となった美冬、その姉で義妹となった夏希、秋葉と暮らす子供たち。当初は馴染まなかった彼女たちを、通称で入手した種族ペンライトで「家族ならセックスするのは当然」と暗示をかけることに成功。それを機にんだ美冬の妹で医師の春河と対峙するが、ボリボリで周囲に成功し自分と春河とは恋人同士であると暗示をかける。以後、四人の美しく巨乳の家族たちと毎日のように身体を重ね、平穏な日々を送っていた。

美冬、ちゅっ  
問宮 雄一



まみや みゆゆ  
問宮 美冬  
B:94 W:68 H:89  
第一の義妹。地味ながらも黙った顔立ちに際やかな微笑をたたえる優しい女性。家事全般が得意な良妻賢母タイプ。

まみや なつき  
問宮 夏希  
B:89 W:66 H:88  
美冬の長女で女子校生。わがままタイプのリア充美少女だが、義妹により第一に敬けられ、従順でかわいらしい義妹となった。



ひのほら はるか  
日野原 春河  
B:90 W:58 H:85  
美冬の妹で精神科医。義妹により第一の恋人となった。キャリア志向のため気が強いが、義妹になれば心優しいタイプ。

まみや あきは  
問宮 秋葉  
B:90 W:68 H:89  
美冬の次女で女子校生。引っ込み思案な性格だったが義妹により積極性が出て、ずいぶん第一に性活な生活をするほどに。

成海 弥千代 なるみ やちよ  
B:98 W:58 H:89

問宮家の隣に住む人妻。控えめな印象だが芯の強い一面がある。夜の誘いを断って以来、夫から求められなくなりセックスレス状態となってしまった。



桜空 ななえ おうぞら ななえ  
B:90 W:60 H:88

問宮家のすすまわにに住む人妻。嗜好きのお蔵がタイプ。それが買いたのか夫に浮気されるようになり、セックス面では寂しい思いをしている。



陸辺 渡子 おかべ るいこ  
B:88 W:55 H:82

問宮家のある地区の町内会長を務める人妻。夫はエリート官僚で、自身もキャリアウーマンで選民思想が強い。夫婦ともに仕事優先でセックスレス状態。



美冬さんの眼鏡の奥にある瞳も朝の爽やかさは正反對に潤んでいるし、口の端から唾液がこぼれ落ちそうになって、舌ですくい上げてこくりと喉を動かしている。

「んっ……朝から元氣ね」

「美冬さんがこんなことをするからじゃないですか」

「喋っている間にも、美冬さんが大きな胸をぐにぐにゆくと動かし続ける。何度も何度も身体を重ねた間柄ならでは手慣れた動きで、美冬さんのおっぱいが僕のペニスに吸いつきながら刺激を身で受ける。まるで胸の中に挿入しているかのように、ペニスが見え隠れする光景は、目覚めて一番に見る景色としてはかなり刺激的だ。美冬さんのような美女が奉仕してくれるのには、男として反応しない方が失礼だろう。」

「ちゅっ、むっ……最初は普通に見えて、そう思ったんだけど、雄一くんが股間がばんばんに張り詰めていたから……あむっ」

「朝の生理現象じゃないですか……おっ、美冬さん、さっ、先陣……ああ、いいですよ」

僕のリラックスに促して、先陣を咥え込んだ美冬さんが舌をちろちろと動かす。この鈴口を刺激するやり方が僕の好みだというのは、言わなくても理解している。温かい快感に腰を落しながら、ふとあることに気付く。

「あれ、でも今日って美冬さんの番でしたっけ？」

僕の言葉を聞いた瞬間、美冬さんの動きが止まる。ゆっくりと口を離し、唇と亀頭を唾液の橋で繋げながら露骨に目を泳がせる。

「えっ……雄一くんはこがはち切れそうだったから……駄目、かしら？」

まるで玩具をねだるような口調で言いながら、ぐにぐにと胸をこねる。間に挟まれている僕のペニスはそれだけで悦びの先走りを滞らせる。

「うーん、でもそうすると夏希や秋葉がまたへそを曲げちゃいますね」

「……」

僕の指が痛い所に刺さったようで、哀しげに眉根を寄せる。新しい家族の中では、美冬さんが一番優しい。娘たちの機嫌を考えて



しまったのだろっ。

「ああ、でもここまでされてやめるのも生殺しですよ。だから美冬さん、こっちを見て」

「あ……」

ベッド端に置いてあったペンライトを美冬さんに向けて。紫の光を視認した瞬間、美冬さんの瞳がどこか焦点を失ったかのように揺れる。

「夏希たちへのお流しも兼ねて、全力で僕の精液を搾り取ってください」

「ええ……頑張って雄一くんに射精してもらいます……」

こくりと潤いたのを見計らってペンライトを消す。やがて焦点が戻った瞳で、美冬さんが僕の顔を見ている。

「じゃあ美冬さん、さっきみたいに咥えてください」

「はい……んっ、雄一くんの熱くて潤いて……んっ、れるっ」

自分の谷間から顔を覗かせる亀頭へ、指がミルクを絞めるように舌を這わせる。ミルクではなく先走りの精液こけ汁を舌先ですくって飲み込み、唾液を先陣へ塗りつける。

「あむっ、んっ、んっ、くっ」

小さな口をいっぱいに向けて、膨らんだ僕のペニスを咥え込む。そのまま、舌がこねるように絡みついてペニスを刺激し続ける。

「ああ……いいですよ美冬さん、気持ちいいです」

「んっ、ふっ、んっ」

返事がなくても、悦んでいるのが分かる。胸の谷間はますます熱くなって、桜色に染まった美冬さんの頬が緩んでいる。

父親の再婚相手、義母である美冬さんがここまで献身的に奉仕してくれるという事実が、僕の平をこまでも熱く映くする。

先ほどペンライトでかけたような催眠は、すでに補助のようなものだ。今はもう、美冬さんも妹たちも、進んで僕に奉仕してくれる。

「んっ、んっ、んっ、んっ、ちゅっ、れろっ」

いったん口から離し、一生懸命舌を動かす。亀頭の先端から唇首、そして前をたっぷりと唾液をまぶした舌がなぞる。

「うっ……ああ」

ぬるりとした気持ちよさに、呻き声が漏れる。振れているだけで感じていたのか、美冬さんのたわな胸の先端がすでに熱くなっているのが見ただけで分かる。

快感に導かれるままに、両方の乳房をつまむ。

「ひあっ！ 駄目、駄目と雄一くん！ 今は私がしてるんだから、あつ、んくっ！」

僕が指で先端を転がすたびに、ふるふると震える。その動きが授けられた早に別の刺激を送って、僕の腰も突き入るように浮いてしまう。





僕のくだらない冗談に、それでも美冬さんはまんざらでもない表情で笑う。そんな義母の眉を持つて、くるりと反転させる。

「美冬さん、四つん這いになって、後ろから入れたい」

「あっ……この体勢はちょっと恥ずかしいわね。私の身体、潮れてない？」

「大丈夫。美冬さんの身体は綺麗ですよ。ほら、僕のチンポもこんなになっているのが分かるでしょう？」

最近食べ過ぎを気にしているわりには、美冬さんの身体は完璧が取れている。大きな胸に、くびれた腰。そしてむちりとしたお尻。今からこの身体を好きなように貪れるというだけで、股間がびくりと反応してしまう。それをお尻に擦りつけると、美冬さんは熱っぽい吐息を漏らす。

手早く自分も全裸になり、後ろから美冬さんのオマンコに照準を定める。先端が触れると、くちゅりと濡れた感触が出現してくる。

「んっ……」

「美冬さん、入れますよ」

「あっ、ううううっ！」

美冬さんの中にゆっくりと侵入する。何度も味わった腔内が、今度も嬉しそうに絡みついて腰が吸いついてくる。熱烈な歓迎を受けながら、根本まで埋め込む。

「くっ……はっ」

「全部入りましたよ。美冬さん、気持ちいいですか？」

声を出す余裕もないのか、美冬さんの後頭部がこくくと上下する。その反応に気をよくして、抽挿を開始する。

「あっ、んっ、あっ、ふっ、雄一くんの、出したばかりなのに……凄いや、あっ！」

「美冬さんの中ももうで気持ちいいですよ。美冬さんのオマンコ、すっかり僕のチンポの形になっちゃいましたね」

「やあ、恥ずかしい。あんっ、んっ！」

羞恥から身体をくねらせるが、それがさらに中の締め付けを強くする。まさしく僕のペニスでこねたオマンコが、嬉しそうにちゅうちゅと吸いついてくる。

亀頭と竿で美冬さんの中を味わいながら、腰の動きを速める。

「あくっ、あっ、奥に、奥に来るっ、雄一くんのが奥にっ！」

「僕の、なんです？ なにが奥に来るんですか？」

「あっ、あっ、意地悪……今日の雄一くんは意地悪だわ……あっ！」

わざとピストンを止めて、奥をこねるような動きに変える。じんわりと一番奥を刺激された美冬さんがごかしげに腰を動かすが、両手首を掴んで強引に止めさせる。くいくいと、まるで馬を制御するように目の前の美女をコントロールする。

「あっ……くっ……本当に意地悪……んんっ」

焦らされたせいか、美冬さんの同様な背中に汗が滲みだしてくる。

「んっ……う、オチンポ、雄一くんの大きくて嬉しいオチンポが私の一番奥に来るっ！」

「はい、よくできました」



「あつ、くっ、んんっ、あああつ！」  
「寝返とばかりに、今までよりも速く喉を動かす。ばばんばんと肉がぶつかる音と、美冬さんの喘ぎが合奏して僕の耳を淫靡にくすぐってくる。首だけじゃなく、目の周でうねる美冬さんの背中と、背中越しにも分かるくらい揺れている美冬さんの巨乳が目も惹きつける。」

「そしてもちろん、美冬さんの中にみつちりと埋まっている僕のペニスも、言い表しようのない気持ちよさに包まれている。まるで美冬さんの中で溶けて一つになったかのように、抽挿のたびにがちがちの股間が湧けるような快感が腰から広がる。」

「あんっ、あつ、凄いい、気持ちいい、雄くん、雄くん、雄くんっ！ あううっ！」

「美冬さんの悦びの音が、僕の部屋に響き渡る。切なげに僕を呼ぶ声に促されて、さらに強く速く突き入れる。ぐじゅぐじゅに湧けた美冬さんの中は、息子のピストンを全力で受け止めて、愛おしそうに締めつける。」

「僕も、気持ちいいです。美冬さん！ 美冬さんのオマンコ、最高です！」

「あつ、んっ、雄しいっ、ひあて、あつ、あああつ！」

「美冬さんの中がぶつてくる。熱々になった中が、二回目の射精をねだつてゆううちゅうと喚びつけてくる。「一番奥も、僕の精子を受け入れよう」と慕っている。」

男として、愛しあう家族としてそれに応えてあげなければいけない。濃縮された快感が

竿の中を駆け上り、手綱を引くように美冬さんの両手を強く握みあげる。  
「オマンコに、美冬さんのオマンコの中に僕の精子を出しますよ！」

「うんっ、んっ、出して！ 雄くんの精子、いっぱい出してっ！」

「喘ぎとおねだりが等分に混じった声をあげて、美冬さんの背中がくくつと反る。へそとお尻が揺る揺るぐに突き上げながら、美冬さんの耳元へと口を寄せる。」

「美冬さん、愛してますよ。」

「っ！ んんんんんんんっ！ イッくううううっ！」

僕の喘ぎを聞いた瞬間、美冬さんの中が今までで一番強く締め付ける。ペニス全てを握きしめるような抱擁に、僕の限界もあっさり訪れる。

「くっ、あつ、ううっ！」

「あうっ、んんっ、あつ、出てるっ、雄くんの出てるっ！」

絶頂に達するオマンコの中に、僕の快感の証をたふりと吐き出す。びゅるびゅると叩きつけるような勢いの射精を、美冬さんが嬌しそくに嚙み込める。

「あうっ、んっ、ふう……」

押しつけながら、竿の中の一滴も残さずに吐き出す。二度めとは思えないほど勢いのある射精のたびに、美冬さんの中もびくびくと震えて悦びを返してくる。

「ふっ……うっ。美冬さん、気持ちよかったですよ。」

「んんっ……嬉しい……」

最後の一滴まで搾り出して、残滓を搾り付けのように奥をこねる。上半身を突伏伏した美冬さんは、突きだしたお尻を揺らしてそれに応えてくれる。

「あつ……」

半萎んになったペニスをゆつくりと抜く、美冬さんが寂しげな声を漏らす。だが、起き抜けに三度は精力を増強した僕でもきつい。それに、そろそろお尻も減ってきた。股

間からは、溢れだした僕の精液がとろりと垂れ落ちている。

さすがに、この状態で朝ご飯をねだるのは酷だろう。気持ちよくさせてもらったにだし、今日は自分で用意するとして。」

「美冬さん、僕は下に降りてご飯食べてますね。美冬さんはゆつくりしててください。落ち着いたら降りてきてくださいばいすから。」

「ん……はい、分かったわ……んん、ちゅっ」

うつとりとした目で僕を見てくる美冬さんにキスをしてから、服を着る。そうすると、思

い出したかのように腹が鳴る。

さて、とりあえず朝ご飯だ。

● ● ●

「夏希、秋葉、おはよう」

下に降りると、僕の家系である二人の義妹が先にご飯を食べていた。今日は予備校のない僕とは違い、学校の制服を着ている。

顔に勝ち気が出ている夏希と、その妹でこちらは対面的に大人いそうな容姿の秋葉だ。ただ、夏希はもとより秋葉もその身体が大人しいスタイルではないのは開々まで知っている。

「……おはよう」

「……おはよう、お兄ちゃん」

いつもは朗らかに挨拶を返してくる夏希も、内気ながらも最近は一っかりと返事をしてくれる秋葉も、どこかなくじつととした視線でこちらを見ている。

「どうしたんだ、二人とも。体調でも悪いのか？」

「兄さん、それ本気で言ってる？」

トーストを飲み込んだ夏希が視線をさらに凝らせて僕を見る。

「声、丸聞こえだったわよ、それにそんなに長い間ママが上から降りてこない意味が分からないほど、バカじゃないし」

「あ……」

「気まずげに頬を掻く。秋葉の方を見やると、これも小さく頷く。夏希の言うとおり、二人にはバレバレだったようだ。」

「別に兄さんが誰かセックスしようがいいんだけどさ。でも、今日ってママの番だっけ？」

「夏希……」

「不機嫌さを隠さない声で夏希が言う。これも痛い指摘だ。家族のコミュニケーションである身体に触れ合いには違わず、その日の当番を決めている。ただ、それが他の家族と一緒にいるときに始まったりとか、あるいは当番自身が誘ったりと大体が複数でのプレイになつていてうやむやになつていくことが多い。」

「とはいえ、そこは彼女たち同士で暗黙の了解があるらしく、その日の最初に手を出すのは当番の人であるとか、その日の主導権は当番の人が握るとか、そういう部分で折り合いをつけているらしいというのは僕も感づいている。」

「そして今日の当番は美冬さんではなく、秋葉だつたはずだ。見れば、普段は太人しい秋葉もほんの少し眉根を寄せて朝ご飯を食べている。」

「これは、中途半端な有め方では逆効果だろう。」

「ごめんごめん、当番のことを忘れてるつもりはないんだけどさ。美冬さんがあんまり綺麗なものだから僕が利かなくなつたんだ。ほら、二人の母親だけあつて美冬さんは魅力的だから」

「それは分かるけど……」

「いくぶんか不満が相らいたようにけど、まだ消えてはいない。なので、本命の言葉が続ける。」

「だからさ、今日は夏希と秋葉、一人ずつ愛しあおう。二人が満足するまで、付き合おう。」

「兄さん、それ本当？」

「食い気味に夏希が反応する。秋葉目を輝かせてこちらを見ている。効果があるとは思つたが、こんなに饒舌だとは思わなくて少々たじろいでしまう。」

「あ、ああ、約束するよ。学校から帰ってきたら、それぞれ付き合つてあげるから、順番を決めておきなよ。」

「順番なんて……私、今日学校休むわ！」

「夏希、それは駄目。」

「勢い込んで立ち上がった夏希を、強く押し止める。また夏希の顔に不満が浮かび、そんな義理に僕はゆくりと泣き出す。」

「今日は休みだけれど、僕だって予備校のある日に夏希や秋葉を抱きたいと思つても我慢してるんだから、春期だつて仕事はちゃんとしてるだろう？ 学校や仕事をちゃんこなしてから、愛しあおうよ。」

「でも……ママは……」

「なおも不満げに呟く夏希の肩に手を置いて、眼を合わせる。」

「うん。だから今日はもう美冬さんはおしまい。そのぶんの時間を二人に使うよ。それでいいだろう？」

「お姉ちゃん、お兄ちゃんの言うとおりでと思う……」

「秋葉……」

「なにかを言いかけた夏希が、秋葉の目を見て口を閉ざす。今日の当番は秋葉であるし、なによりも一目で分かるくらい情欲に潤んでいる秋葉がそう言っているのなら、夏希もこれ以上食いがたない。」

「そのあたり、出会つた頃は僕が強かった夏希が家族の和を尊重してくれているのも、こうして家族同士のコミュニケーションを続けているお陰でもある。」

「でも確かに、僕も我慢せずにやつちやつたのは悪かつたと思つてる。だからさ、これはお詫びのしるし。」

「兄さん、んむっ！」

「視線を戻した夏希の肩を撫で、抱き寄せる。美冬さんに劣らず大きな胸が朝服越しに僕の胸板で濡れ、まらかさを伝えてくる。そのまま、舌を差し入れると夏希も応えて口の中で淫らにダンスを踊る。」

「んっ、ふっ、んんっ、んくっ」

「僕の唾液を流し込み、夏希の唾液を舐る。朝のディープキスはさつきまで食べていたトリストの味がした。」

「んんっ、ふうっ、あっ……」

「しばらく義妹の口を味わつてから、ゆっくりと身体を離す。頬を火照らせた夏希が、落けた視線をねっとりと絡ませてくる。」

「ほら、秋葉も、おいで。」

「あ、お兄ちゃん……んっ」

「次いで秋葉を呼び寄せて抱きしめる。夏希とはまた違った柔らかなさを全身で堪能しながら、舌と味のついた唾液を飲み込む。」

「んっ、ふっ、んん……んっ」

「こっちは紅茶だろうか。夏希とは違つておらずと差し出された小さな舌を絡め取りながら、舌りと味のついた唾液を飲み込む。」

「んっ……ちゅっ」

「吸いついてくる柔らかな唇を、名残惜しいけれども身体ごと離す。秋葉も夏希と同じように、潤みきつた胸で僕を見やる。」

「やっぱり、今日休んじやだめ……」

「夏希……」